

うこともあります。

この考え方は小児精神科医の有名なドナルド・ウィニコットによるものですね。この分野においてはジョン・ボールビーと並んで英国では大変影響力のある先生ですが、彼が言っているのは、反社会的行動というのはある意味、希望の象徴でもある、その傾向があると言っています。行動として問題視されているような、例えば盗みをしたり、攻撃的な行動に出たりというような反社会的行動も、中にはフラストレーションが非常にたまってしまうような、大変な問題を引き起こす場合もあるかもしれませんが、ある意味では期待の持てる行動である可能性があるというのです。ですから大変迷惑を被る行動ではあったにせよ、どうしてこういう行動を取るのかと、その理由をまず理解しなくてははいけません。

その際に、非常に参考になるのが、通常の発達段階を経た子どもたちが普通どういうふうになっていくのかということや、里親にとっても非常に重要かと思えます。子育て経験のおありになる方、またない方、いろいろさまざまかと思えますが、通常の発達、発育をしていく過程で、子どもはどういうふうになっていくのかという、そういうノーマルなケースはどうかということや、まずご理解いただくということが必要ですね。特に発達段階に遅れが生じている子どもたちは、12歳になっても2歳のようなふるまいをする場合があります。

当時、私は初期のトレーニングを受けましたが、その中でお母さんと赤ちゃんが映っているビデオを見せられたんですが、当時私は23歳でしたので、何でこんなビデオを見せられるのかと思いましたが、私が面倒を見ていた子どもたちは大体年齢層にすると8~14歳ぐらいの少年たちでしたので、ただそのビデオを見て、実際に私が面倒を見ていた年齢層の子どもにも非常に関連性のある、大変役に立つビデオだということがあとで分かりました。

今朝も私たちは、そういう機会をいただきまして、乳児院で赤ちゃんを観察させていただきましたが、実際に子どもたちと向き合っていくような職業につかれる方は、もしくは大人が対象であったとしても、精神分析を行うような従事者の方は、赤ちゃんをよくよく観察するということが、お仕事の中で非常に役に立つ経験になるのではないかと思います。

先ほどご質問にもあったように、さっきまでとてもハッピーだった子どもが突然怒り出したり突然感情的にかき乱されてしまうという状況になったという話をいただきましたが、今朝も赤ちゃんたちを目にしていまして、ニコニコしていたかと思うと急に泣き出すと。特にそこに理由はないんですね。同じような現象が起こっていると言えるのではないかと思います。もっとも、今朝は、赤ちゃんがどうして泣き始めたのかと私は不思議に思っていたのですが、多分私のような知らない変な大人が来て、それで泣き始めたのかなと思って見ていましたが、すぐに職員の方がその赤ちゃんをひざに乗せてあげたら、泣きやんでニコニコし始めました。子どもたちがどういうふうに行動するのかということや非常に良い例だったかと思いますが、その際にどう対応していいのかわかる上でも、その子の性格を理解することが、赤ちゃんであってもパーソナリティや人格はあるので、それぞれ個性があって、やはり職員の方もその辺をよくご理解された上で対応されていたかと思えます。

(省略)

T:この子がフランキーという子どもで、私が最初に世話をした子どもたちの中の1人ですが、この子の言葉は今でも忘れられないですけれども、本当に命を吸い取ってやるぐらいの勢いで、ニヤニヤしながら話しかけられたのを覚えています。

本当に難しい子だったので、それは誇張表現ではなかったということがよくあとで分かりました。ただそういう言葉はあまり子どもが使うような言葉ではないので、非常に普通ではないなということはすぐに感じられたんですね。彼の生い立ちとかこれまでの経緯を見て、彼が発する言葉から判断するんですね。いろいろなことが分かってきたわけですが、われわれの施設に送られてくる前に、3カ所の里親家庭を経て、われわれのところに来た子どもでした。各家庭で3回とも里親の方の、養母の方ですね、あるいはお母さんのほうが、もう神経的におかしくなっ

しまったということが全家庭で見られた現象でした。それぞれの里親家庭のお母さんがやはりそういう神経症的になってしまっ、お医者さんにかかると、里親として子どもを預かることは、健康を害する原因になっているのでやめなさいということと言われて、また次の家庭にフランキーが移されますが、そこでもまた同じことが2回も3回も起こっているということです。よく英国では自分の子どもであっても親がよく、「あなたのせいで私は死にそうになっている」とか、「本当に追い詰められている」というようなことを言うことがありますが、フランキーの場合もやはり里親の家庭でことごとく親を病気に、神経を参らせてしまうぐらいに追い詰めてしまった経験があるので、私に対しても、全く同じことが起こると予言していました。

ですからこういった非常に難しいフランキーという子どもに向き合っていくにあたって、私もその子について非常によく理解していかななくてはいけないという点もありましたし、またどういふアプローチが一番役に立つのかということもあらかじめ把握していかななくてはいけなかった。また支援も必要でしたし、トレーニングも役に立ったと思いますけれど、こういった非常に極端なケースに対応していくために何が必要なのかということをもまず理解する必要があったわけです。

こちらでやはりケアをする人との関係性を一貫して形成できるかどうかということが重要になってきますので、こちらの乳児院でも先ほどご説明いただいたとおり、できる限り1人の子どもに対して1対1、もしくは特別なケアラーがサポートをするような形で、その子との間で特別な愛着が形成されるように、サポート体制を組んでというご説明を受けましたが、もちろん赤ちゃんとか幼児はそういった関係というものがなくなってくると思うんですが、もうちょっと年を取っている、もう少し大きい子どもたちでも、そういう愛着を形成する機会がなかった子どもたちに関しては、もっと大きくなってからもやはりその機会というのが必要になってくるわけなんです。ですからこちらの乳児院で提供されているようなケア体制、サービスというのは、本当は、もう少し年齢の高い子どもたちにとっても、非常に関連性のある、当てはまる内容だと思います。

(省略)

T: 来日して、いろいろなグループホームとかさまざまな施設とかファミリーホームと言われていたところを訪問させていただきまして、最終日に乳児院を訪れる機会をいただいたということで、本当に締めくくりとして非常に適切な展開になったのではないかと思います。あまり赤ちゃんとか幼児の話というのはそこまで今回はしませんが、やはり治療的ケアを行う、里親であれ施設の職員であれ、非常にこの幼児期、また赤ちゃんの時代からの展開を理解するということは非常に重要だと認識しています。

混同を招く事象の1つに、物事が良くなっている過程の中で、実際に顕在化している行動が悪くなっているということもあります。ですから一歩進んだと思いきやまた逆戻りしてしまうということもよくあります。

ケアをする立場としては、どうやってポジティブな姿勢を保つことができるのかということところで、やはりここでも支援が重要になってきますが、正しいやり方を取っていても、状況としては悪化しているように見える場合もあるかと思います。

では、質問が沢山あるということですので、講演はここで終了にして、個別のご質問にお答えしたいと思います。有難うございました。

(了)

10月20日 二葉乳児院パトリック・トムリンソン氏講演会参加者 アンケートから 回答者 18名

今回の講演会に参加されての感想をご記入ください

No.	1
1	子どもの気持ちを大切に大きな愛で子どもとの信頼関係を作るお話、心に残りました。
2	国柄が違うので、この話を日本ですぐに生かすのは難しいが、具体的な目標として、とらえることができそう。
3	イギリスならではの事例でなく、日本でも適応できるお話をありがとうございました。先週、早大でのお話を聞き、今回、質問することができました。レジュメも沢山ありがとうございました。
4	子どもには、とにかく愛情が大切だということです。愛情をいかに多く、本人が感じられるかで、信頼関係も育つし、心も育っていくと思います。それは、すべての子どもに共通で、国は違って同じなんですね。愛情により安心が生まれ安心していくのだと。貴重な経験のお話をいただけて、とてもわかり易く理解が深まりました。ありがとうございました。
5	子どもを預かってからの難しい事例を多く聞けたのがよかった。自分が想像していたものよりはるかに難しい問題が多いということがとても参考になった。施設の存在意義および重要性をよく知る機会を持てたことがよかった。
6	具体的にTomlinsonさんの体験談を聞くことができとても考えさせられました。どのように子どもを変えようとするのではなく、どのようにまず自分を変える、整えるのか、ということが伝わってきた。シンプルなポイントでわかりやすく、そして1つ1つにいろんな方向から話をしてくれたので、具体的に自分も今後どうしたいかを考えられました。海外の状況なども知れてとても参考になりました。
7	愛着形成の重要性を改めて認識できた。ライフストーリーワークを通じた養育をもっと学んでみたい。一般の子どもたちにも必要なケアがPatrickさんの話にもあり、とても参考になった。日本まで来てくれたことに感謝します。
8	今日はありがとうございました。有意義なお話でした。大変な被虐待児の里子を6歳から大学生になるまで育てた経験からお話が身にしみました。日本では、18歳、高校卒業で里親子制度は終了ですが、18歳で社会に出るのは大変です。私たちは見守るしかできません。皆様のお力添えが励みになります。(長い感想文で一部省略)
9	トムリンソン先生が、このお仕事をなさるようになった経緯からのお話で、グッと引き込まれました。学校で講義している先生のお話でなく、実際の現場に基づいたお話、何よりも、ケアする側に湧き起こる思いがけない感情に触れられました。あまり、里親の研修では聞く機会のない点でした。今まで聞いたことのない、すばらしい機会でした。ありがとうございました。
10	ネグレクトされた子どもに対する基本的な愛着関係の構築がいかに難しく重要か考えさせられました。
11	子どもは試し行動→幼児返り→通常の成長の3段階を通して、普通の成長過程に入る。したがって、試し行動は「反社会的行動は希望の兆候」という言葉に対応しているように思う。幼児返りは「Life Story Work」に対応している気がする。いずれにしろ「子ども自身の人生の再構築＝スーパービジョン」が必要ということと思う。
12	里親の大変さが理解できた。外国では非常に対応が整っている気がして、これから日本も見習うべきだと思った。
13	愛着が重要という話に納得。里親を含め、子どもを育てる人にとって愛着のできていない子どもを育てるのは、まして、しつけをするのは難しいと思う。乳児院の長期入所で無愛着になった子どもを育てるのではなく、早くから、里親家庭で愛着を育てたいと強く思った。
14	参考になった事柄も多く、また共感する部分もあり、とても勉強になった。子どもの問題行動をどうしてかと読み取ることは大切で対応に必要な点とか、生い立ちも知ることが大切。情報としても必要だという事はわかっているが、よくなっているのか？悪くなっているのか？明確にわかれば楽になると思う。ただ、家庭の中で、24時間一緒にいると治療的なことは難しい。里親子は長期戦だなあと感じてしまった。
15	いかに、愛着形成が重要であるか学んだ。生の声がきけたので、参加してよかったです。
16	重いトラウマを抱えた子どもたちを治療的施設でケアするのか、一般の里親家庭でケアできると考えているのか、とても興味深かったです。国とか都とかの上の考え(方針)を知りたいと思いました。

17	<p>里親向けの講演でしたが、トムリンソン氏の実戦経験の話は、施設でのケアに必要な事そのものだったので、個人的にとっても良い内容になりました。すぐにでも取り入れたい事ばかりでしたが、施設全体で、お話にあったことをまず共有して、同じ意識を持つ所からだと思います。簡単ではないですが、参加されていた方の知識や問題意識の高さが、大きな刺激にもなりました。</p>
18	<p>養育家庭に特化した内容かと思っていましたが、施設に通じる内容でよかったです。レジュメの中身の濃さに比べて、講座の時間が短く惜しい気がしました。今後の施設が担うべきこと将来の姿が少し見えたような気がしました。まだまだやらなければならないことがあるな…と思いました。</p>

資料9-1
A JOURNEY IN THERAPEUTIC CARE
治療的ケアへの道のり

By
パトリック トムリンソン
Patrick Tomlinson
For
Japan October 2012

日本語訳: 開原 久代

1. Beginning はじめに

1984年 私は、イスラエルのキブツで6か月のボランティア活動を済ませて、英国に戻ってきました。

私はすでに、社会事業経営学の資格をもっており、子ども関係の仕事をしたと漠然と考えていましたが、具体的なことはわからないので、英国に戻ると、新聞広告をみて仕事さがしをはじめました。

2. The Cotswold Community コッツワルド コミュニティ

当時はまだインターネットが普及していなかったので、コッツワルドの情報がないうまで面接を受けました。
そこで、はじめて、ここが、虐待によるトラウマを受けた子どものための機関であることを知ったのです。

ここは、従来の「認可学校」(教護院?、少年院?)の体制を変え、治療的コミュニティとするために、内務省が実験的に設立したところでした。

「認可学校」はいわば、非行少年の刑務所のようなところで、子どもたちにとって過酷な場所だったのです。

実際に、コッツワルド認可学校を去った85%の子どもは、最後は成人の刑務所で過ごしていました。



3. A Nationally and Internationally Renowned Treatment Centre 全英国、また国際的にも知られた治療センター

私がコミュニティで仕事を始めた時は、設立されて17年目でしたが、既に、著しい問題をもつ少年たちの治療施設として内外に知られていました。

私がそこで14年勤務する間に、米国、ヨーロッパ諸国、ロシアなどから沢山の見学者やボランティアが訪れ、特に、日本から大きなグループが見学に来られたことを覚えています。

4. Leadership and Consultancy リーダーと顧問の先生たち

成功の鍵は、Richard Balberie校長らのリーダーシップと、臨床面の顧問Barbara Dockar-Drydale先生によるところが大きいと思います。Barbaraは子どもの精神分析と、小児科医Donald Winnicottの理論と、Tavistock研究所の人間関係論を取り入れて、施設全体の相談ののってくれました。

この3つの領域は、トラウマを受けた子どもとかかわるための必携の理論ですが、リーダーシップと強力な臨床的かかわりを、組織全体で支える仕組みがあって、はじめて実現できるのです。

私は、今はこのことを十分理解していますが、当時はあまりわかりませんでした。

5. Barbara Dockar-Drysdale
バーバラ先生



6. Interview Process
採用時のインタビュー

インタビューを受ける前、私は自分の子ども時代のことと、このコミュニティの仕事との関係についての手紙を書くことを要求されました。

これは異例のことでしたが、私は了解しました。第一回面接は無事通過して、次に3日間の体験訪問に招かれました。

こうしたやり方は、採用する側も応募者側も、決断をする前に、仕事の内容を体験させてもらい、じっくり考える機会を与えてもらえました。

7. Numbers of Children and Staff in a Home
ホームの子どもとスタッフの人数

そのコミュニティは農場の中の小さな村のようなところでした。近くの町から5マイル(8キロほど)の郊外にありました。少年たちは、10人ずつ、4か所の家それぞれ住んでいました。スタッフとその家族は、コミュニティの中の自分たちの家に住んでいました。

10人の少年を5人チームの職員が担当し、ふだんは、3人の職員が常に一緒に過ごしていました。我々は、週に70~80時間、朝7時半から夜11時までの5日勤務でした。勤務のない日は1日半でした。

問題が起こると、夜中まで、時に明け方まで働き、仲間の誰かが病気になる、職員は休暇を返上して働きました。それは賃金仕事というより、天職であり、人生となっていました。

8. Vacation at the Seaside
海岸での休暇



9. Education
教育

少年たちは、コミュニティの中の小さな学校で教育を受けていました。教師たちも、夕方や週末を少年たちの家で率先して過ごしていました。教師たちと職員との密着した仕事が小さいけれど、しっかりと結びついたチームを築いてゆきました。

ある意味では、これは、子どもたちにとってよい方法でしたが、時に、教育とケアの境界が不鮮明になり、まずいということもありました。

年月を経て、治療的ケアと教育の課題がだんだんはっきりしてきました。

10. Extreme Behaviour
著しい行動

この子どもたちは、著しいトラウマ体験をもち、回復して成長するには特別な治療的ケアが必要ということは、私にもまもなくわかってきました。

まず第一に、私はある光景をみてショックを受けました。たとえば、10~14歳の年長の少年たちが制止できないパニック状態になり、2人の大人から身体的拘束を受ける中で、悲鳴を上げ、叫び、つばを吐き、蹴ったり、殴ったりの行動を見た時でした。私は、このような子どもがいることを知りませんでした。

少年たちは、なかなか面白い子たちで、評価できる面をもっていましたが、突然、静からカオスの状態に変貌したのです。

そして、私のような新参者には、何が彼らを豹変させるのか特別な理由を見つけることが出来なかったのです。

11. Why do we do this Difficult Work?
なぜ、私たちはこのような困難な仕事をするのでしょうか

考えてみると、このような難しい仕事に長時間取り組むことにどうして興味をもったのか不思議に思うことがあります。
いくつか思い当たることは、

コミュニティにいる少年たちの生い立ちを知りました。殆どは、生後まもなくから、時に自分の親たちからひどい虐待とネグレクトを受けてきたのです。

私は幼少時からいつも逆境にある子どもたちに関心をもっていました。どうしてかわからないのですが、

精神分析的解釈によれば、私はこうした喪失体験をした子どもと同一化しているのかも知れないのですが、表面的には明らかでないのですが、なにか、親子関係に問題があったのかも。

12. Unconscious Reparation
無意識のなかでの償い

他の理由としては、私は大家族の中で育ち、常に感謝し、恵まれない人々のことを気遣うよう教えられてきたからかも知れません。

他人に尽くす仕事を選ぶ人々は、自分の中に何かを充たし、また、自分が両親に与えた迷惑への無意識の償いをしているのかも知れません。

ある意味で、どのような動機でこうした仕事にかりたてられたかは、関係のないことかも知れません。

13. Personal Motivation
個人的な動機

しかし、仕事への姿勢として、深い個人的モチベーションを持つことは、大きな違いをもたらすのです。ある人たちは何かよいことをしたい、可哀そうな子どもに愛を与えたいという感傷的な気持ちで仕事をしています。そのことは悪くはないのですが、深い動機がなければ長続きしません。

あなたを無視し、憎み、傷つけようとし、あなたのやることは全て拒否し、しかも来る日も来る日も同じことを繰り返す子どもを愛することは至難の業です。自分のモチベーションのレベルについて、どのくらいの覚悟があるのか考えてみてください。

私は、どのような困難があっても辞めないぞという大きな決意を感じていました。

私は、時にたくたくたになり、絶望的になった時も、この決意が最初の数年のわたしを支え、またしがみついていた。

14. Emotional Resilience
精神的回復力 レジリエンス

決意を持つと同時にレジリエンスが必要です。

ある人たちは、精神的なレジリエンスが乏しくてこうした仕事にむきません。自分にレジリエンスがあるかは、これまでの人生を考え、困難な状況にどう適応してきたかを考える必要があります。

怒り、悩み、悲しみなどの強い感情を持つことは健全といえますが、もし、こうした感情に打ち負かされるようでは、難しい子どもたちにかかわる仕事は無理かも知れません。

15. Seeing Children Grow and Develop
子どもたちの成長と発達をみること

私はテスト訪問の際、子どもとのかかわりのひとときを楽しみました。一つのホームに10人の子どもがいるのですが、皆、発達レベルが異なり、ある子どもとはうまくやれましたが、難しい子どももありました。子どもたちは、ちゃんと発達してゆくということを見るのは楽しいことでした。

ある子どもは、訪問者の関心を引き寄せようとするので、少なくともゲームをしたがる一人の子どもの相手をするのは簡単でした。

それで、子どもたちの大半と一緒に過ごすことは、興味もあり、面白く、愉快なことだと感じました。

16. Fish and Chips by the Sea
海岸でのフィッシュ&チップス



17. Personal Growth of the Workers
職員の個人的成長

私が最初に訪問した時、多くのスタッフは、「この仕事はあなたを変えるよ」と言ってくれました。彼らによると、仕事は自分の子ども時代と自分の性格に踏み込んでくるので、つらいけれど、人間としての成長に繋がるといいます。

私はこの考えに興味を覚えました。

コミュニティは、自分が成長し変わることが出来る場所であり、職場だと感じました。それで、長時間労働や、ふつうの社交的な生活を諦めることも、その仕事の濃密さが子どもたちだけでなく、自分にもためになると感じたのです。

その時は、自分はこの仕事を2～3年ならやれると思いました。

18. The Importance of Supervision, Consultancy and Training
スーパービジョン、相談、研修の必要性

私が出会ったスタッフは皆、22歳から50歳でしたが、仕事に大変 前向きな姿勢をもっていました。

ここは、もっとも問題のある子どもたちに多大な力をそそぐ、異常な場所であることが明白でした。

このスタッフは、特別な研修と理解を要求される何かとても重要な仕事をしているのだとピンとききました。

19. Consultancy and Management
相談と運営

当時私は、コツワルド・コミュニティ の相談担当者たち (Barbara, Isobel, Eric) がいかに経験豊富で特別な人たちだったかに気が付きませんでした。この人たちが、コミュニティの仕事に極めて重要である一方、仕事を支える文化とシステムをつくって下さったことが更に重要なことでした。

毎日、コミュニティで起こったことを議論し考えるマネージャー・ミーティングがありました。ケア担当者は毎週、個別のスーパービジョンをチームマネージャーか、治療臨床を監督する立場のチームの上級職から受けました。

私どもは毎週、仕事についてすべてを語り合うチーム・ミーティングを持ちました。毎週のチーム・ミーティングで、少年たちの治療的業務について顧問相談員と話し合いました。

また2週間ごとに、同じ顧問相談員との個別ミーティングもありました。

20. Training
研修

毎週、1時間のグループ研修があり、そこでは、別のハウスのスタッフや先生たちに会い、前の週に読むようにと与えられた資料について討論しました。

文献類は、通常、かなり難しいもので、Donald Winnicottの論文などでした。

この仕事は、知的にも精神的にもかなり厳しいので、コミュニティは大卒者しか採用しませんでした。

21. The Influence of a Boy
ある少年からの影響

コミュニティで働く決意をさせたある出来事を思い出しました。

3日間の訪問を終えて車で帰る時、5～6年コミュニティで過ごし、退所する17歳の少年Vincent と一緒に、彼が駅で降りるまで30分ほどおしゃべりしました。

彼は、コミュニティで、前を向いて生きるということを教えてもらったと感じていました。この体験がなければ、今もトラブルをおこし、多分、刑務所で生涯を終えているだろうと、彼は言うのです。

彼から、私がコミュニティで働くのかと聞かれ、まだ決めていないけれど、どう思うかと彼に聞きました。

彼は、私があそこ働くべきで、うまくやれると言ってくれたのです。

22. Important Early Lessons – Being Tested and Surviving!
重要な最初のレッスン—ためされて生き残ること！

仕事をはじめてまもなく、私はある重要な教訓を受けました。

私が補充採用されたのは、あるチームメンバーが突然、無断で去ったからです。このことが、少年たちをことさらに新人職員への不信感を深めていました。

この難しいけれど確かな事実は、少年たちとの楽しい蜜月期間があつという間に終わらせたのです。

彼らは、かなり敵意をもち、即座に拒絶してきたのです。

チーム職員よると、これは少年たちが私もすぐ辞めるかどうかテストをしており、彼らが私に信頼を寄せる前の必要な儀式だということです。

チームは少年たちの行動に挑戦しながら、私を支えてくれましたが、これは、通過して体験しなければならぬ道のりだったのです。

23. Broken Nose 鼻の怪我

最初の2か月ほど、少年たちの一人が夜、私がハウスで寝ている時に攻撃してきました。私はうまく対応が出来なくて明け方に鼻を折られるということになりました。

私は病院に連れてゆかれレントゲン写真を撮りましたが、怪我は自然治癒が可能というものでした。

少年に、まだやるならやれという決意で、翌日朝もいつものように7時半に出勤しました。

私は鼻をつぶしたボクサーのようでしたので、チームマネージャーは、腫れが退くまで、家で休息をとるようにと指示してくれました。

24. Emotional Demands of the Work 仕事における精神力

怪我をすることは確かにに気分のよいものではありませんが、感情的な挑戦ほどはつらくないと思いました。

絶えず、拒絶され、敵意のある対応を受けると、消耗し、気力もくじけることでした。もうダメだと思うことが何度もありました。

ある日、私は相談顧問のBarbaralことでもこわくなってきたことを訴えました。彼女は、時に私がやるべき最も大事なことは、ただ生き延びて、翌朝もそこにいることと教えてくれました。

これなら私がやれそうだと言いながら、彼女ははっきりと、そのことはどんなにか大変かと強調しました。

この言葉は、これまで言われた中でもっとも助けになるものでした。

25. Dealing with Powerful Negative Feelings 強力な否定感情の扱い方

一番つらいことは、自分の中に、子どもたちへの著しい怒りや憎しみなどふだんはみられない感情を見出した時です。

Donald Winnicottは、このことの実態と重要性を1956年の画期的な論文「憎しみと逆転移」に書いています。

特に、私を絶えず苦しめたある少年を思い出しますが、彼は私の弱みを見つけては絶えず、事件のキッカケをつくってゆくのでした。

私は、反応しないようにして懸命に働いていました。

ある時は、彼が私にからみついてきた時、彼を追い払う衝動を抑えるために自分の手を背中にまわしていたことがあります。

彼は、こうしたことすべてを面白がっているようにみえました。

こうした仕事をめざす多くの大人は、子どもたちのためによいことをしたい、自分たちは世話する人と思っている場合、彼らの中にこうした強力な否定的感情が潜んでいることを見つけることはショックでした。

26. Anti-Social Behaviour as a Sign of Hope 反社会的行動は希望の兆候

Winnicottは、そういう感情は問題でないけれど、その感情から子どもを拒否したり、傷つけたりしないことが重要と指摘しています。

子どもたちは、あなたが自分たちの気持ちをわかってくれるのか、気分を害したら何をするのか——それでも自分たちの世話をしてくれるのか、それとも辞めてしまうのか、また、これまで彼らが経験したように彼らを殴るのかを見ているのです。

Winnicottを引用すると、もう一つ重要な考えは、子どもの反社会的行動は希望の兆候なのです。

子どもの難しい行動は、彼らが何か必要なものを求めているサインなのです。完全に引き籠っている子どもより、問題をおこす子どもの方が見込みがあるのです。

27. The Relevance of Early Child Development 幼少期の子どもの発達との関係

最初の数か月で、コミュニティは臨床面と組織運営の両方の面で際立った方法をもっていて、それがよく機能していることがよくわかってきました。

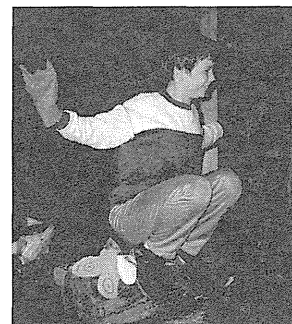
私たちは、研修として沢山の抄読資料を与えられ、ガイダンスを受けていました。

時々、グループ研修で、母親と赤ちゃんのビデオを見ることもあり、当時、このことは何かへんに思えたこともありましたが、これは、私たちがやっている仕事と大変関係があることがわかりました。

ある意味で、少年たちは7~14歳でしたが、乳幼児と共通すること以上のニーズがあったのです。

彼らは、幼児によくみられる反応や怒りを示していたのです。

28. A Community Play コミュニティの遊び



29. The Importance of a Clearly Defined Therapeutic Approach
明確な治療的対応の重要性

理論と実践に支えられた働き方は、極めて重要であります。

理論と実践は固定したものではなく、絶えず進化しているものであることが同時に重要なのです。

コミュニティの中でのスーパービジョン、相談、研修などの様々な、フォーラムは、常に我々の経験を広げ、自分たちの取り組みの改善を模索するものであります。

最初の数か月の間に、私はこれらのフォーラムの重要性を認識しました。

30. Making Sense of our Experiences
経験したことの意味を理解すること

スタッフが自分たちに投げかけられたすべての困難を処理する場合、支援を受け、よく考え、経験したことの意味を理解する余裕を持つ必要があります。

こうしなければ、仕事はすぐに完全に混乱と、圧倒的で不可能な状態になってしまいます。

このことは、子どもたちが、世の中と自分たちの人生をどうみているかの反映なのです。

ケアをする人は、自分たちの経験を理解し、子どもたちには、時間をかけて、彼ら自身が自分の経験を理解できるように助けるのです。大事な考えは、どんな行動にも意味があるということです。

その意味をみつけるまで、ただ時間と空間と注意深さが必要なのです。

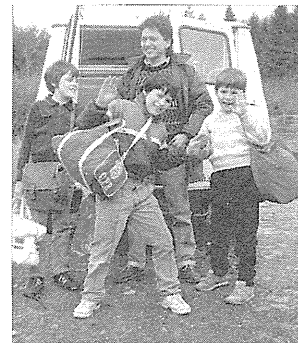
31. Becoming a Carer
養育者 (Carer) になること

最初の数か月を経た後から、私は一人の子どもの担当者になった。役割は、彼の毎日の必要な世話をし、とくに愛着関係を築くために彼の精神的な状況に気を配り、彼に特別な関心をそそぐことであります。

長時間勤務は、確かに養育者としてのこの役割を果たしました。

もし、この子どもたちが、いろいろな意味で、幼児に似ていると考えらるなら、子どもが一人の人と集中した関係をもち、他の人々とは支援的關係をもつことは明らかに大事なことであります。

32. Me and the Boys!
少年たちと私



33. The Importance of Consistency
一貫した関係の重要性

たとえば、夜は寝る前の本を読んでもらう人も、起こしてもらう人も同じというのは、多くの幼児にとってはあたりまえのことではありません。

こうした一貫した信頼関係を築くことが、少年たちに自分のまわりの世界は自分を育ててくれ、予想が出来、そして安全な場所だと感じるようにしてくれるのです。

当然なことながら、もし子どもがこうした経験をすることがなく、さらに悪いことに傷つけられたり、虐待されている場合、私たちが、世話をし、辞めることはないということを認識するまで時間と持続力と忍耐力が必要となります。

34. It Takes Time for a Traumatized Child to Accept Care
トラウマを受けた子どもがケアを受け入れるまでには時間がかかる。

私が世話をした最初の少年は、私に何も要求しようとせず、私に与えた物は必ず捨てるかメチャメチャにしていました。

1年以上経って、与えられた物の一部を喜ぶようになった時、何かほしがると両親から欲が深い悪いことと言われたので、人になにかおねだりすることはなかったと話してくれました。

しかし、彼が言うには、ここに来た時、他の子どもが食べたい時にビスケットなどを取って食べているのに、誰からもしかられないことに気付いたということでした。

彼は、これはいいんだと思ったけれど、おねだりしたり、質素なビスケットのようなものを楽しむまでに1年以上かかったのです。

35. Getting Better Can Make Things Worse
よくなることは、物事を悪くすることがある。

トラウマを受けた子どもたちのケアにあたり学んだ重要な教訓は、よくなることは物事を悪くするということでした。

子どもが信頼を寄せてくれて希望がもてるようになると、彼は自分が受けている積極的なケアの信頼性をテストするような問題行動を示すようになります。

また、子どもが防衛的でなくなり、感情が出せるようになると、自分の過去の体験への強い感情が芽生えてくるのです。

たとえば、子どもは人生で失ったことに対して沈みこんだり、怒りを感じたりすることがあります。

子どもはよくなっているのに、物事は悪く感じられることがあるのです。

回復への道のりは、2歩前進し、1歩後退するという具合です。

36. Symbolic Communication
シンボルによる伝達

私が面倒をみていた別の少年は、シンボルによる伝達の意味を学ばせてくれました。

トラウマを受けた子どもたちは、自分たちの感情を言葉を使って伝えることが出来ない場合があります。

しかし、彼らは遊びや描画などの方法でシンボルを使っています。子どもが話しかけても反応がない場合、このことに気づいてよく観察しなければなりません。

たとえば、子どもが遊んでいる時、玩具の動物や遊んでいる人々との間に発生する暴力に気づくことがあるかも知れません。

37. Frankie and Freakie the Frog
フランキーと蛙のフリーキー

この子ども、フランキーはある日、私に、布で蛙のぬいぐるみが作れるかと聞いてきました。

多くの子どもたちは、クマのぬいぐるみとか動物のものを持っていました。

ある子どもたちは、スタッフの世話を受けるより、スタッフに自分のクマのぬいぐるみの面倒をみさせる方が安全と感じていました。

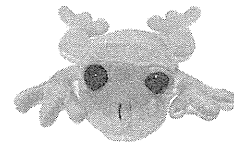
ある子どもは、クマちゃんが気分が悪いからベッドでだっこでネンネさせて、おいしい温かい飲み物をあげてと言ってくるのです。

もし、あなたが、どうしてクマちゃんが具合が悪いのか聞くと、子どもはママがいなくなって淋しいからという話をします。

子どもは、また、特に、養育者が不在の時、クマちゃんを自分と養育者の間の空白を埋める移行対象として使うのです。

とにかく私は蛙のぬいぐるみキットをさがして、蛙をつくりフランキーに渡すと彼は蛙をフリーキーと名付けました。(英語では、フリーキーとは、ちょっとヘンという意味でフランキーそのものでした。)

38. Freakie the Frog
蛙のフリーキー



39. Symbolically Mending Frankie
フランキーの象徴的な治療

その後2年以上、フリーキーはどこに行くのもフランキーと一緒にしました。フランキーの機嫌が悪い時には、彼はフリーキーを引っ張り出して泥んこの中に放り投げるのです。彼は繰り返し同じことをやり、そのたびに私はフリーキーを修理し縫い直しをするのです。

象徴的には、フランキーが自分はまだ価値がないと強く感じた時に、私はフランキーを元に戻し彼のためのケアを行ったのです。

Barbara先生は、こういうことを繰り返しやることの重要性を強調されたのです。

最後には、フランキーは、自分についての自信を取り戻し、フリーキーも、もっと心地よく暮らせるようになったのです！

40. Islands of Functioning in a Sea of Chaos
混沌とした海の中で、生活できる島々

フランキーに回復のきざしが見えてくると、私たちはアセスメントに取り組みました。

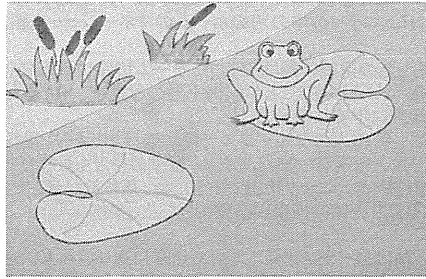
Barbara先生は、フランキーは、列島のような存在で、混沌とした海の中に、自我という島を浮かべていると言われました。

彼女によると、我々の仕事は、彼が島から島に移動する時、混沌カオスの中に落ちないようにしてあげることだということです。

その頃、ある日、私がフランキーを学校に迎えに行くと、彼は嬉しそうに自分がつくった新しいゲームをみせてくれました。

彼は、円い池と、その上にスイレンの葉を描いていました。彼が言うには、これはフリーキーが葉っぱから葉っぱに水の中に落ちないように飛ぶゲームだということでした。

41. Lily Pad Game
はすの葉っぱのゲーム



42. Frankie Moves on
フランキーの退所

フランキーが、とてもよくなったのでホームから退所することになった時、フリーキーは、飛行機のパイロットの仕事に就くということになりました。これは明らかにフランキーの気持ちと結びついていました。

もし、私たちが象徴的な会話に気づいていたら、子どものことを学ぶ機会が沢山あり、このように子どもの要求に答えたり、出会うことが出来るのです。

43. Management
マネージメント

コミュニティでの2年半の生活では、私はなんとか乗り越えたばかりでなく、個々の子どもの仕事も、グループとしての子どもの指導もそれなりにうまくやれるようになり、1か所のホームのマネージャーになりました。

この役割を担って知った、最も重要なことは、仕事の中のあること——たとえば、明確な境界をおくこと、着実な日常生活、子どものニーズに合わせることで、チームとのコミュニケーションをよくし、スーパービジョンを通してチーム・メンバーを支えることが絶対的に必要であるという確信をもつに至ったことでした。

私は、ケア担当者としてコミュニティで働きはじめた時と同じように、このマネージャーの役割をしっかりとやろうと決意しました。

44. The Importance of Supervision
スーパービジョンの重要性

私の仕事の主な部分は、子どもたちとチームが分担してくれました。もし、チームが子どもへの仕事をよくやってくれれば、私はチームとの仕事をきちんとやる必要がありました。

コミュニティの中で、信頼できるスーパービジョンがあるかないかで、どれほどの違いがあるかを見てきました。

このことが確実でないホームでは、かなり高率の職員交代と子どもたちの問題行動が見られました。

しかし、このことはどちらが先なのか知ることは難しいのです。高率な交代や子どもたちの問題が大きいと、スーパービジョンや相談、研修の会議が開けなくなるからです。

45. Demands on the Manager
マネージャーへの要求

マネージャーとしての最初の数年は、私は個々の子どもたちのケア担当者としても働きました。このことはうまくゆきましたが、子どもたちのニーズとチームのニーズに合わせることは、着しく大変なことでした。

この体験をしてから、マネージャーは個々の子どものケア担当者になるべきでないこと、ホーム全体の運営とコミュニティ全体や外部の世界との関係を保つことに専念すべきという信念をもちました。

このことは、コミュニティの方針となり、だんだんと、子どものホームに要求される管理的業務が増えてくると、ホーム・マネージャーはこのことに全力の注意をはらうことが要求されるようになりました。

46. Establishing a Therapeutic Culture
治療的文化を築くこと

私が取り組んだ最初のホームは、強力な治療的文化をはぐくんできていました。その理由の一部は、チームを支えて成長させる方向に、私とコミュニティが高度のレベルでかかわることが行われていたからだと思っています。

その頃、チームも、自分たちと、ホーム、そして子どもたちの成長に高レベルのかかわりを示していました。

子どもたちは、自分たちのニーズを大切にもらえるという体験をした環境の中で、確実な進歩をみせたのでした。

47. Culture Carriers 文化の担い手

年月が経てば、子どもたちはいわゆる「文化の担い手」になるのです——彼らは自分たちの家庭がよいところであることを望んでおり、そういう家庭を持つとします。

たとえば、窓を壊し、物を傷つける代わりに、面倒を見たり、修理したりするのです。

それでいろいろな物がいつも壊れて、傷のあるままにしないように、貯金したお金で子どもたちに、新しい本や玩具などホームによいものを選んで買って買うことにしていました。

48. From Chaos to a Strong Culture 混沌状態から強い文化へ

このホームのマネージャーを3年勤めてから、混沌状態に陥っているコミュニティの中の別のホームのマネージャーを頼まれました。

子どもたちの逸脱行動は深刻で、チームの手に負えなくなっていました。いろいろなことが制御不能の状態、子どもたちは怯え、極度に不安な様子でした。

彼らは、4~5人のグループで一緒に逃げ出したり、屋根に登ったり大人を襲撃したりしており、個々の子どもたちの多くはいつもの怒りのパニック状態であるため、落ち着かせ、安全な状態になるまで身体的拘束が必要でした。

私は、前にのべたのと同じ方針で仕事に取り組みました。このホームが安定し、強い文化を成長させるまでには、ほぼ1年かかりました。

49. The Size of the Children's Group 子どもグループの人数

最近、英国では、5人以上の子どもがいるホームは稀となりました。これは、一般的には賢明な選択といえます。

しかし、もし、より大きなグループを運営することが出来れば、小グループでは得られない多くのことが学べるのです。

大グループが有利なことは、発達段階の異なるいろいろな子どもが一緒であることです。大グループには、恐らく、発達も順調で、私が指摘したような文化を支えてくれる3~4人の子どもが含まれているのです。このことは、新しく入所する子どもにとって、他の子どもも自分と同じようにホームに来て、もうじき退所することを見届けられるので役にたつのです。

このことは、凡ての子どもたちに、回復することが可能であるというエビデンスを示しているのです。

しかし、小グループはより安全な選択ではありませんが、いつもそうではなく、3~5人のグループはまた、とても難しいのです。もし、2~3人の小グループとなると、全体のグループを押しつぶすような、とても挑戦的な時期を体験することになるのです。

50. External Training 外部研修

私はこのホームのマネージャーをしている時、子どもの治療的ケアについての修士資格への研修を受けました。これには3年かかりましたが、私にとってかけがえのない体験となりました。

この研修は、コミュニティの外の大学で行われたので、週に1日、私は英国の様々な機関から集まる他の学生たちと一緒にしました。この研修は、かなり実験的試みがなされていました。私たちは、1日中グループで活動し、議論したり、調査したり、様々なプロジェクトに取り組みました。

これは、私にコミュニティでの体験について、見直したり、また将来の見直しをする上にすばらしい体験となりました。また、ここは、以前、考えたことなかった物事を学ぶ経験を提供してくれました。このことコミュニティでの研修では、資料を読むことが常に重要なことでした。仕事に関連した文献を読むことにより沢山のことを学びました。また、仕事や学んだことを見直し、評価する批判精神を身につける役にたちました。

51. Staff Training and Development スタッフの研修と養成

私は修士資格をとると、私はコミュニティの副校長になり、スタッフの研修と養成の仕事につきました。この役割は、私はまた上級マネージメント・チームの一部としてコミュニティの中を毎日走り回り進展状況を確認することでした。

私は、4か所のホーム・マネージャーとそのチームの臨床業務の責任者にスーパーバイズをしました。

この役割の中で、スタッフの採用、スーパービジョン、相談、研修の重要性について学んだことを実践することができました。

私たちは子どもの治療的ケアの3年間の研修プログラムを開発し、大学の認証評価を獲得しました。

52. Staff Recruitment スタッフの採用

私たちはコミュニティ全体にわたるプロセスとシステムをさらに発展させました。

私たちは、よい資質、特に情緒的レジリエンスと感受性に適切なバランスを持っている応募者をよりよく見分けられるように全体のプロセスを詳細に見直してスタッフ採用の方法を改善させました。

私たちは大きな進歩、たとえば、60%の職員が4年間はやめないというところまで達しました。

53. Developing Therapeutic Practice
治療的実践の発展

コミュニティは長い間、4人の上級臨床家とBarbara先生とで、子どもの治療的業務に関する大事なことを考えながらグループを支えてきました。

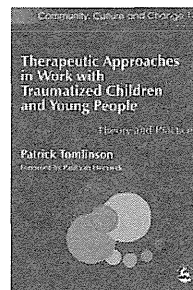
Barbara先生が退職され、子どもの臨床心理士のPaul先生に交代しました。

グループは、私の司会により、毎週の会議を続けました。

会議が終わるごとに、コミュニティの他のスタッフのために記録を作成し、討議と指導の際のアイデアや意見をまとめました。

後に、このグループでの仕事を「トラウマを受けた子どもたちへの治療的接近、理論と実践」という本にまとめました。

54. Therapeutic Approaches in Work with Traumatized Children and Young People: Theory and Practice, Tomlinson
「トラウマを受けた子どもたちへの治療的接近、理論と実践」
パトリック・トムリンソン著



55. Therapeutic Principles and Adapting to Change
治療の原則と変化への適応

コツワルド・コミュニティの14年間は、私が最初に2年と考えた期間よりかなり長くなりましたが、そのあと、私は新しい挑戦の準備をしていました。

コミュニティも、大規模な国の慈善団体に接収され大きな変革を迫られていました。

この時まで、私の3日間訪問をした時に多くのスタッフに言われたように、私は大きく変化していました。

56. Positive Outcomes for Children
子どもたちの確実な成果

私は多くの子どもたちが、確実な未来にむかって、健康的な若者に変化、成長、発達するのを見てきました。

今日、この仕事をはじめて25年を経て、現在30~40歳になっている当時の少年たちの何人かと連絡をとると、彼らの多くは順調な経過を示し、自分たちの子どもを立派に育てていることがわかりました。

私が面倒をみたある少年は、コミュニティを去る時、もし子どもが出来たら、本来なら自分がそう育ててもらったように子育てをしたいと言っていました。彼は、自分の子どもを虐待することなどありえないと言いました。

虐待のサイクルを破ることが、まさに、この仕事のすべてなのです。

57. Setting up New Homes
新しいホームの設立

私は新しい児童ホームと学校を設立している機関で新しい仕事を見つけました。私の役割は、治療的ホームをつくらせて文化を築くことでした。

私がコミュニティで学んだことがどの程度全く異なるところで生かされるかが私の挑戦でした。

前に述べたように、コミュニティは田舎の農場の中にありました。今度の新しいホームは、小さな村の中のふつうの家のホームで、都会的な環境でした。

58. Changes in the Hours of Work and Size of Homes
勤務時間の変化とホームの規模

この時まで多くの法律の改正があり、スタッフは私たちがコミュニティで働いていたように長時間勤務は出来なくなりました。週、40時間勤務が標準となりました。

政府による規制で、ひとつのホームの子どもは最大5人までとなりました。この改正で、これまでの10人の子どもを5人のケア担当者チームでみていた代わりに、5人の子どもを10人のケア担当者チームでみることになりました。しかし、多くの治療原則はそのまま適用されました。

私たちは子どものニーズ対応に一貫性を保つために、チーム内の意思疎通を確実にするために、さらに働くことになったのです。子どもたちが十分な個別の関心を得ることを確保するためにはまた、注意深い準備が必要なのです。

59. Using Time Creatively 時間の独創的な使い方

スタッフの勤務時間が少なくなると、スーパービジョン、チーム会議相談、研修の時間も少なくなります。

これらのことを実施するためには、独創的な手段をさがす必要がありました。

私たちは、チーム会議は週1回、スーパービジョンは2週に1回、相談は可能であれば行い、研修は仕事の中や、スーパービジョンやチーム会議を通して行うということになりました。

こうした新しい状況の中でも、困難は伴いましたが、治療的児童ホームを設立することは可能だとわかりました。

60. Location of the Home ホームの所在地

たとえば、もし子どもたちの逸脱行動が、近隣を脅かすことになると、ホームのまわり空き地が沢山ある場合と比べると管理がとて大変になります。

一方、子どもたちがその一員として地域社会に結びついていることは有益なことでもあります。

この新しい仕事で気付いた問題は、この組織が近く別の事業を始めようとしていたことでした。私はその移行の前にホームの中にしっかりした文化を築くには時間がないと感じました。

この組織のリーダーは、本当の治療的環境をつくりだすには何が必要かを十分理解していなかった。

61. SACCS SACCS治療センター

2年ほどあとに、私はSACCSの創設者で何が求められているかを熟知しているMary Walshに会い、所長のポストに応募するようにすすめられた。Maryはソーシャルワーカーで、子どもの仕事に情熱をそそいでおり、SACCSはコツワルド・コミュニティのように純粋に子ども中心の組織でした。

SACCSはそれぞれ5人の子どもの10か所のホームを持っており、Shrewsburyの街の広範囲に点在していた。

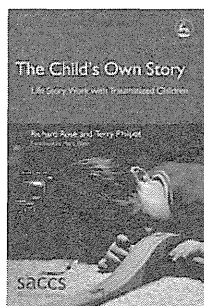
SACCSは、治療的施設ケアを行うと同時に、子どもたちの個別治療とライフ・ストーリー・ワークを行っていた。

62. Life Story Work ライフ・ストーリー・ワーク

ライフ・ストーリー・ワークは、子どもたちが自分の人生の意味を理解し、自分たちの知らない、または誤解されたり歪められていた生い立ちにかかわる論点を解決するのを手伝うプロセスであります。

目的は、子どもが自分の生い立ちについて現実を受け入れ、筋が通った理解をすることをめざすもので、そのことが彼らの自己同一性の健康的な発達に大変大切だからです。

63. The Child's Own Story: Life Story Work with Traumatized Children, Rose and Philpot SACCSの同僚 Rose氏の著書



64. The Recovery Team 回復援助チーム

SACCSのホームのケア担当者は「治療親」と呼ばれており、治療親は個々の子どものセラピストとライフ・ストーリー・ワーカーとともに回復支援チームを構成しています。

このチームは、ふだんのコミュニケーションや一緒に会議に参加することなどで十分に統合されているということが絶対に必要でした。

回復支援チームは、3つの異なるけれど互いに補足的な方法により、子どもとそれぞれの子どもの全体の目標の理解を共有しているのです。

65. SACCS Integrated Treatment Model

SACCSの全体的治療モデル

Integrated approach to Recovery

sacccs
achieving recovery

66. The SACCS Recovery Programme
SACCSの回復プログラム

私はSACCSで、Maryと他のスタッフとSACCS回復プログラムを作成しました。これの重要な部分は、私たちが子どもにめざした成果を定義したことでした。24の成果項目は、

- ・子どもが自分は何者でどこから来たのかという自己受容
- ・自分をコントロールする力の発達
- ・自分で適切な選択ができる
- ・大人と子どもと適切な関係がつかれる
- ・善悪の判断の発達
- ・もう自分も他人も傷つけないetc.

成果が定義づけられると、その時、治療的親業、ライフ・ストーリーとセラピーで求められている作業の成果を明らかにしました。最終的には、この仕事を効果的に行う方法を明らかにしました。

何が望ましい成果か、それを達成させるための作業、まだどうやるかがわかると、これらの成果にむかって個々の子どもの進歩を評価する方法が必要となるのです。

67. Bessel Van Der Kolk, Bruce Perry and Mary Walsh at a SACCS Conference
SACCSのカンフェレンスでのKolk,Perry先生たちとMary先生

sacccs
achieving recovery

68. Assessment
アセスメント

私たちは、回復支援チーム全体に影響し、さらに統合するであろうアセスメント方法を開発しました。

回復アセスメントに従い、回復支援チームは個々の子どもの個別回復プランをつくり、かれらの日常生活あらゆる場面を網羅するようにしました。

たとえば、個々の子どもにより就寝の仕方、朝の起こし方がいかに違うか、ケア担当者との愛着形成、仲間との関係づくりをどう支えるか、どのくらいの養育が必要かなどです。

69. Assessment Model アセスメント・モデル

1 = Learning
2 = Physical Development
3 = Emotional Development
4 = Attachment
5 = Identity
6 = Social & Communicative Development

70. A Containing Network for the Child
子どもを包みこむネットワーク

SACCSでは、私はSACCS独自の専門的手法、たとえば性的虐待児への対応とライフ・ストーリー・ワークの重要性など沢山のことを学びました。

統合的なチームは、実際に皆が同じ場所に住んでいなくても、子どもたちとスタッフのための一種のコミュニティを形成しているということを教えられたのです。

それは、子どもを取り巻く、包み込むようなネットワークでありました。

71. Continual Evolution
さらなる発展

SACCSの仕事を終えてから私はある組織の治療プログラムとモデルの開発にかかわることになりました。オーストラリアのライトハウス財団の仕事で、彼らとケアの治療モデルの著書を出版しました。その本が日本語に翻訳されることになり大変嬉しく思っているところです。

ライトハウスから学んだ貴重なことは、物語の重要性でした。それで、私は皆様に、治療的ケアについて私自身のお話をするのがよいかと考えました。

私は現在、英国の組織の仕事をしており、治療的ケアと教育の実践モデルと組織の開発に取り組んでおります。この仕事から学んだことは、私たちは絶えず進化する必要があるということです。私たちそれぞれの立場は皆、独特なものなのです。

72. Therapeutic Residential Care for Children and Young People: An Attachment and Trauma Informed Approach, Barton, Gonzalez and Tomlinson

子どもと若者のための
治療的施設ケア
～愛着とトラウマを知る～
バートン、ゴンザレス
トムリンソン著

Therapeutic
Residential Care
for Children and
Young People

An Attachment and Trauma-Informed
Model for Practice

国際医療福祉大学
下泉秀夫先生と9名
の翻訳グループにより
現在、翻訳中



2013年6月
福村出版より
出版予定

73. The Development of Therapeutic Approaches in Japan
日本における治療的アプローチの発展

いつの時代にも関係のある原則があります。というのは人類のニーズはそれほど変わらないからです！

しかし、私たちは新しいことを学び、学んだことを自分たちが生活し、働いている特別な文化的環境に適用してゆかねばなりません。

この考え方は、私が自分のキャリアをスタートさせたコツワルド・コミュニティの中に生きていました。これが、治療的環境の本質なのです。

私たちは、治療的コミュニティが示したこの「探究する文化」をどう確立出来るのでしょうか？このことこそ、子どもたちとまた、子どもと働いている人々に成長と発達を促進させてくれるのです。

ここ、日本でまさにそのことに取り組むすばらしい機会があります。

Thank you for listening to my lecture.

資料9-2
Life Story Work
ライフ・ストーリー・ワーク

By
Patrick Tomlinson
For
Japan October 2012

日本語訳： 開原 久代

2. IDENTITY
アイデンティティ

Schore(1994)が指摘しているように、私たちのアイデンティティのほとんどはふだんは意識していない、自分は誰かということに関係しているのです。

アイデンティティの発達の重要な部分は、私たちが気づいていない乳児期につくられているのです。

数年前、私は英国から米国に移動しました。異なる国と文化の中で生活することは、それまで自分のアイデンティティとして考えてもみなかったことを気づかせてくれたのです。

当たり前としていた物事、これまで考えたり、確かめたりしようとしなかったことはどこも同じと考えていました。たとえば、英国人は、自分の家のまわりを、フェンス、生垣、塀、門などで明確な境界をつくる傾向があります。私が住んでいる米国では、はっきりした境界をつくらずに開放的なスペースにするのが最もふつうです。家のまわりの芝生や庭は隣家と繋がっているのです！

それで、私は自分のアイデンティティに気づき、英国の歴史文化と結びついている境界を感じたのです。

1. WHY STORIES ARE IMPORTANT
なぜ、ストーリーが大事なのか

ストーリーは、自分たちの立場を示してくれます。

開原久代代表の研究班が、子どもの治療的な仕事について講演を依頼してくれました。私の講演レジュメを読んで開原から私のキャリアの話をしてほしいと頼まれました。日本では、この領域の治療的ケアの歴史は短いので、皆、関心を持っているというのです。私は、資料作成や治療的な仕事に関連する基本方針とともに自分のストーリーを楽しみながら書きました。何かを学ぼうとする時、一番興味をそそくことはストーリーだと思います。

私は、仕事の応募者のインタビューをすることがありますが、その場合、出生から、家族歴では祖父母までさかのぼってライフ・ストーリーを話してもらうことがあります。質問者としての私の役割は、質問と傾聴とメモをとることです。さえぎられることなく自分の人生を語る自由を得ると、皆、2~3時間話してくれます。

彼らが、喜んでストーリーを語ってくれる時には、よい体験か悪い体験かはあまり関係がないのです。こうしたインタビューをする理由は、応募の動機、かれらの生い立ちの特徴、トラウマを受けた子どものためになぜ働こうとするのかなどを理解するためなのです。

3. THE IMPACT OF TRAUMA ON IDENTITY FORMATION IN CHILDREN
子どものアイデンティティ形成に及ぼすトラウマの衝撃

子どもが虐待とネグレクトによる長引くトラウマを受けると、その衝撃は子どもに首尾一貫した自己感を発達させることを妨げてしまいます。特に、幼児期早期のトラウマ体験は子どもの発達をゆがめてしまうのです。

子どもは、自分を守ることに精いっぱいとなり、生き残ること以外のことには関心を示さなくなるのです。こういう状況では、子どもは自分が楽しんだり、好きと思ったことをみつけて、自分の興味を発達させることが不可能となります。彼らは、ひたすらに苦痛を逃れることに関心をもつのです。

その上、トラウマを背負った子どもの生活は、頻繁な委託不調と環境の変化に曝されて、混沌状態となっているのです。

あるトラウマを背負った子どもたちは、10歳までに、10~20か所の異なるホームで生活し、頻繁な委託不調を体験しているのです。

これらの要因のすべては、子どもがしばしば自分は誰なのかも、自分が人生で関わった人々のことも、自分がどこから来たのかもわからないことが関係しています。関係理論派の人たちは、このことを、アイデンティティの拡散といい、Fahlberg(2008)は、もし子どもが自分自身の歴史を知ることが否定されたら、心理学的に、健康な成人への成長は困難であると言っている。

4. Nurture and Play 保育と遊び

これらの子どもたちへのワークは、本来的には、子どもに自分が何が好きで、楽しいか、嫌いかという肯定的な感覚が発達する体験をさせ、彼らのアイデンティティ感覚を育てることです。

これは沢山の保育体験と、物事や遊びを楽しむ機会を与えることも知れません。トラウマを体験した子どもの多くは遊ぶことが出来ないのです。簡単なゲーム遊びができると、自分は何が好きで楽しめるかという意識が発達し、子どもが自分のアイデンティティを確立するのを助けるのです。

ひとたび、子どもが、自分は何が好きか嫌いか、何を感じているか、自分たちは安全か、ありのまま愛されているかということを知る基地を持つと、自分たちはどこから来たのかというもっと大きな疑問と自分たちの人生の旅のことを考えはじめることが出来るのです。

このワークは数年かかり、ライフ・ストーリー・ワークのプログラムの一部になります。(Barton et al,2005)

6. INFORMATION GATHERING 情報収集

トラウマを受けた子どものどのような仕事においても、子どもの歴史を理解することは極めて重要であります。子どもの歴史は、どうして現在、子どもがこうなのかということを理解するのに役立ちます。私たちは子どもたちの人生で何が困難をもたらしたのか、強さも弱さも含めてどう彼らが成長したのかなどの経験を知る必要があります。「個人を理解するためには、その人の歴史を知る必要がある。」

(Perry,Hambrick,2008)

Kolk,Mcfarlane,Hart(2007)は、完璧な歴史を集めることの重要性和、何を含めるべきかを述べています。彼らは、患者と言う言葉を使用していますが、私たちががかかわっている子どもにもあてはまることであります。

「治療をはじめる前に、完璧な歴史をとる必要がある。これは、トラウマとなったストレスの内容、トラウマ体験の際の患者の立場、その時とられたか、とられなかったかの行動についての気持ち、患者の人生に与えたトラウマの影響、自分や他者への理解、トラウマの再体験、日常の克服方法、認知機能のレベル、特別な個人の能力、精神疾患の既往歴、病歴、家族歴、職歴、文化的、宗教的信念等」

5. Creating a Narrative of the Past and Present 過去・現在の物語の作成

「断片的で壊れた、断続的な個人の物語は、一人の子どもを危険に曝す。自分の家族、地域社会、そして文化の中で迷子になった子どもは、神経発達学の面から傷つきやすい。ライフ・ストーリーがなければ、子どもは漂流、断絶し、傷つきやすい——報われることも、ストレスの調整も、人間関係なども、彼らの神経生化学は凡てマイナス方向にすっかり変わってしまい、大脳皮質に由来する個人の物語は消えてしまう。彼らを治そうとする私たちの慣習的な努力は、欲求不満を引き起こし、無効となる。」(Perry 2012)

トラウマを受けた子どもは、しばしばふつうの家庭生活を失っています。

Fahl berg(1994)によると、家族の一つの機能は、「一生にわたり、少数の人との間に絶えず接触があること。家族のメンバーと長期にわたり関係があると、過去の出来事を明らかにし、過去の出来事を現在に合わせ解釈する機会がある。

社会的養護の子どもたちは、しばしばこうした機会が否定される。彼らは家族を変え、担当者を変え、出生した家族との連絡を失っている。」

ライフ・ストーリー・ワークをやるかどうかにかかわらず、私たちの仕事の一部は子どもたちにふつうの家庭の体験をしてもらい、その体験を内省化することを支援することです。私たちは、親が写真やアルバム、スクラップ・ブックをつくるように、子どもの人生の出来事の記録を保管します。子どもたちが過去に起こったことを確かめたり、ストーリーが読み直される機会をつくるために、この記録は家の中に置きます。

7. WHAT IS A LIFE STORY PROCESS ライフ・ストーリーの作業とは

作業の目的は単に子どもの歴史を作成することではありません。それはまた、子どもが自分の人生の別の面に愛着を持っていることの意味を明らかにしたり、感じ方の歪みを修正したりすることでもあります。

たとえば、トラウマを受けた子どもは、虐待を含めて自分に起こった出来事に、しばしば責任を感じているからです。このことは、全く機能不全を起こすだけに見えますが、責任を負うことによって、子どもは、傷ついた、無力感をなにかコントロールする力に置き換えることが出来るようになるからです。

更に、子どもは、虐待した親や養育者に対して肯定的なイメージを保持する必要があるのです。このことは、潜在する喪失、怒り、不安の圧倒されるような感情から子どもを守るからです。

(Kolk,Newman,2007)

従って、そういう子に働きかける重要な作業は、子どもの不適切な責任感覚を取り除きながら、どこに責任が実際にあるのかを見届けるのを手伝うことであります。

この作業を行うためには、自分の体験についての子どもの記憶や考えを調べるだけでなく、人生の中で、別の人々や出来事との関係の中で彼らの感情を調べることが必要なのです。この作業はとりわけ困難で苦痛を伴います。

記憶に働きかけることだけでなく、これらの記憶への子どもの気持ちが大変つらいのです。子どもは、こうした感情に恥と罪の意識を感じるかも知れないのです。これらの感情に名前がつけられ、調べられると子どもは、それらを見通すことが出来るようになり、もっとも否定的な自分を責める面が取り除かれるのであります。

8. Working Through Feelings 気持ちにとりくむ作業

「子どもの自分にむけられた否定的な物の見方は次第に他の感情、たとえば悲しみに置き換えられてゆく。

もし、責任感情がとれてくると、子どもは、まさに、自分は何と無力で、あんな風に扱われたことは何と恐ろしいことだったのかということに気づいて行く。

それから、もし、それが自分を愛し、守ってくれるべき誰かであれば、虐待者をどう見るかの修正が求められ、再び、とても挑戦的なこととなる。

この簡単な例から、今、子どもがケアを受け、一緒に作業をしているスタッフに理解されている中で、子どもがもっと、一貫した肯定的なアイデンティティを発達させるために、この作業がどれだけ複雑で必要かが明らかとなっている。」

(Barton et al.2011)

「一般に、ライフ・ストーリー・ブックは、子どもの人生経験について「何が」「いつ」、「なぜ」という疑問に答えるものとされてきた。ブックは、子どもに不当なプレッシャーをかけずにこうした出来事への気持ちを表現する手段として使われてきた。ライフ・ストーリー・ワークは、混乱を解きほぐし、子どもが長い間背負ってきた否定的感情のお荷物の一部を捨てるための手段である。」

(Rose, Philpot 2005, Connor 1985)

10. The Child's Understanding of her own History 子どもが自分のヒストリーで理解していること

このアセスメントは、なぜケアを受けているのか子どもがどのくらいわかっているかを探ることから始めることが最善であります。もし、子どもがよくわかっている時は、子どもの一般的な発達に関係する問題があります。たとえば、子どもに発達の違いがあるか、または、自分の人生の事実に対する感情的な防衛があるかも知れません。

Fahlberg(1994)によると、「直接の仕事の主要な部分は、子どもが感じていることを聞き取ることである。これをやるまでは、私たちは、彼らの情報をふくらませてよいのか、また、彼らの誤解を正してよいのかわからないのである。」

英国のSACCSでは、特別なライフ・ストーリーの取り組みが開発されました。

子どもにとって20回以上の移動はよくあることでした。この子どもたちは、極めて断片的なヒストリーしかなく、トラウマを受けた子どもは言うまでもなく、成熟した大人さえも理解を超えるものであります。これらの子どもたちは、特にライフ・ストーリー・ワークを必要としました。彼らは沢山移動を繰り返すだけで、move onはなかったのです。Fahlberg(1994)が問いかけているように、子どもは自分がどこから来たかがわからなければどうやってmove onができるのかと。

1~2回の移動だけで、トラウマも特にひどくない子どもは、特定のトラウマの出来事についての気持ちを聞くことはできます。こうしたことは治療的ケアやもっと一般的なセラピーで取り組むことも可能なのです。

9. ASSESSING THE CHILD'S NEED FOR LIFE STORY WORK ライフ・ストーリー・ワークの子どもへの必要性のアセスメント

私が論じた多くのことは、今までのところ、子どもの毎日の生活に適用することができます。疑問となることは、子どもに、はっきりしたライフ・ストーリー手法が必要かどうかということです。このことへの回答は、子どものニーズのアセスメントを基盤にしなければなりません。

Rose(2012)が言っているように、「子どものアセスメントが重要な第一歩: 大人の予定表なら、「ライフ・ストーリーをやる」と書くことがあるかも知れないが、子どもでは、望んでからやる最後のことになるかも知れない。」

アセスメント手引書の質問に、子どもが自分たちのライフ・ストーリーに一貫した意識を持っているか、自分のヒストリーに関する感情がその現実と矛盾しないかという項目があります。たとえば、子どもは、虐待の出来事、里親家庭を転々としたことなどのヒストリーを正確に話すことは出来るかも知れません。しかし、もっと重要な質問は、子どもは、これらの出来事の背景にある理由のどれを信じているかということです。子どもは、自分のヒストリーを適切にみているのか、こうした出来事の中で自分を責めているのか、そして自分が悪いからこうしたことが起こったと信じているのかを知ることが重要なのです。

11. The Need for Safety 安全確保の必要

もし、子どもにライフ・ストーリー・ワークが必要と考えられた場合、子どものケア状況が安全で、安心できるまでは行うべきではありません。

これは、子どもは身体的に安全であるばかりでなく、大人を信頼し、愛着をはぐくむことがはじまり、養育、一貫性、予測可能という状況が提供されていることを意味しています。

Kolk, Newman(2007)らが述べているように、「治療の基礎は、治療関係の安全性であります。もし、治療が早急に過去の探究に焦点をおくと、トラウマ的侵襲を和らげるのではなく、ひどくすることになるのです。」